

人はどこへ往くのか

青木 新門

聞き手: 佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多: 葬儀の仕事を始めてから4年ほどで、2000もの湯灌・納棺をされたそうですね。

青木: ええ。ひょんなことから冠婚葬祭の会社に入りましたが、始めはイヤイヤでした。誰もやるものがなかったから、こればかりやっていました。3カ月後位から段々腰が座って、白衣や手袋を着け、礼儀や言葉づかいなどにも気を配るようになると、段々仕事が増えていきました。盆も正月もなく、一日に2件も3件もやりました。とうとう「納棺夫」になってしまった、と思ったものです。

あらゆる仕事の中で最下位、タブーの世界です。「穢らしい」とか「親族の恥」とまで言われ、家族はもちろん親戚じゅうに反対され、一時は付き合いまでこわれられました。

佐多: それでもお辞めにならなかったのですね。

青木: そうですね。何故だかは分かりません。しかしその根底には、私の8歳のころの体験が埋まっているように思います。

終戦を迎えた旧満州で、日本への引き上げを待つ間、難民収容所に隔離されました。食べ物はコーリャンと岩塩だけ。栄養失調のところへチフスが蔓延し、冬が来ると毎日のように誰かが死んでいきました。5歳の妹が死んだときも、くすぶっている石炭の上に置いて来た。翌日見に行くと、燃えてなくてカンカチに凍っているんです。零下30度の世界です。この記憶は消えないですね。

佐多: ……そうですか。

仕事とはいえ2000もの遺体に接すると、見えないものも見えてくるのではないかと、思うのですが。

青木: 納棺夫は10年間続けました。3カ月も放置された蛆だらけの死体や腐乱寸前の水死体にも触れました。昔は農家などの自宅で亡くなった枯木のような死体が多かったんですが、高度成長の頃から病院死体が増え、ぶよぶよしたものに変わっていきました。栄養点滴などのせいでしょうね。

鑑識課の医師や看護婦長さんの中にはもっと多数の死体を扱った人もあるかも知れません。ただ、死を見つめるスタンスが人それぞれ違うように思います。僕の場合は「人間、死んだらどこへ行くんだろうか」ということばかり考えた。《往生》ってどういうことなんだ。他人の死を自分のこととして考えずにいられなかった。で、宗教の本を読むようになったのです。



青木 新門 / あおき・しんもん

1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退、作家、詩人、冠婚葬祭を扱うオックス株式会社取締役相談役。著書に、『納棺夫日記』(第7回地方出版文化功労賞受賞・桂書房)、『木漏れ日の風景』(北日本新聞社)など。本名は幸男。

『死ぬ瞬間』を書かれたエリザベス・キューブラ・ロスさんは「私は神というのは、一つだと思う」と言っています。でも、「私の国の人々を納得させるには、キリスト教的にならざるを得ない」とも。これと同様に、私は仏教的にならざるを得ないのですね。いくら他の言い方をしても、自分の文化や言葉のルートを通っていかないと心から信ずることはできません。まして田舎のおばあちゃんを納得させることはできません。僕が最終的に浄土門の勉強をするようになったのは、阿弥陀というのはサンスクリット語で〈光〉と〈命〉なんだということを知った時からです。ハッとしましたね。

交通事故で若い母親が亡くなった家に行った時のことです。5歳位の子が「おかあちゃん、まだ眠っているの?」と不意に言ったため、2歳位の子を抱いた老婆が畳をたたいて号泣し、納棺どころではありません。やっとのことで仕事を終え、庭に出ると、鮮やかな今年の竹に何か光るものがある。よく見ると透きとおった胎内に卵をびっしり抱いた糸トンボでした。数週間で死ぬ糸トンボが、3億年の昔から命をつらねていることを思うと涙が出ました。

死んだ人はほとんどが安らかな顔をしています。生前、善人だったか悪人だったかなどということには一切関係がありません。

宮沢賢治が死の床で血を吐きながら書いた「眼にて云ふ」という詩に、
こんなに本気にいろいろ手あてももしていただければ
これで死んでもまづは文句もありません

……

あなたの方からみたらぬぶんさんたんたるけしきでせうが
わたくしから見えるのは
やっぱりきれいな青ぞらと
すきとおった風ばかりです

というくだりがあります。これは生も死も超越した視点です。

佐多: そのような世界をご著書につづられたのですね。

青木: 死に携わる心の葛藤を鎮めるために、自分一人のために書き始めました。「自分は何ものであって、どこへ行くのか」、これさえはっきりすればいいのです。

人間、行き先と行き方が大事だと思う。行き先というのは目的、



結論のイメージです。単純化して言えば、南無阿弥陀仏でいいわけですよ。ところが最近は行き方ばかり気にするようになって、行き先がわからなくなってきているんじゃないですか。

友人の話ですが、母親が病院で亡くなる時にお経を聞きたいと言い出したんだそうです。熱心にかよっていたお寺の住職の声で聞きたい、と。友人は病院と折衝し、お寺に行き頼むが、病院は許可しない、お坊さんも「病院が嫌がるでしょう」と渋る。思い付いてお経をテープに入れ、それを病室に届けたんだが、ちょうどその時に母親が死んじゃった。だからお母さんはお経を聞けなかったんですね、後生の一大事に。僕は現場のこういった問題を解決できなければ、今の脳死の問題は解決されないと思いますよ。

佐多：僕も経験しましたよ。父が死ぬ前の治療期間でしたが、治療をする医師や看護婦さんに、病室から出て下さいと言われました。僕は部屋から出ずに傍らで治療をながめていました。きっと嫌がられたことでしょう。

青木：死の直前、人間が全身で死を受け入れた時、必ずと言っていいほど「ありがとう」と言いたくなる。口がきけない場合でも、目で言う。そのたったひとりで、残された人がどんなに救われるか。その瞬間を医師がはずす、ICUに入れない、これは問題だと思います。

佐多：僕は父が死んだ瞬間に、本当に心の底からご苦労様でしたと言いました。死は、遺族にとっては無論悲しいことですが、本人にとってはルネサンス（再生）ではないでしょうか。つまり大きな意味で、実におめでたいできごとのように思います。

青木：親鸞の「われ閉目せば加茂川へ入れて魚に与うべし」という言葉は有名ですが、もうひとつ「おめでとうございますといいなさい」という意味の言葉があります。僕もそう思っています。明るい世界へよみがえるだけだ、と。肉体という衣を脱いでね。

だけど、人間は生きている間は不安でしょうがない。そういう人たちに、そうなんだよ、生も死もないんだよと説くのが宗教なんですね。人は生の側（此岸）から死の側（彼岸）を見ているために、向こう岸は見えないんです。神や仏の視点は、その両側を同時に見えています。そんな^{ところ}から見れば生も死も善も悪もない。あるのは欲望と自我と生存競争があるだけでしょうね。

この間インドの火葬を見たいと思って行って来ました。公営の焼

き場もあるんですが、そこに行けない人たちも沢山いる。下層カーストの人は牛フンかなにかで焼くんだが、半なまのようなのを河に流すんですね。しかも乾季の渇水期でしょう。すぐ側にハゲタカみたいなのが飛んで来ている。実に、生も死も善も悪も混沌と同居しているような世界ですね。

佐多：ガンジス河で沐浴する人々も、そんな死体が流れて来たらそっと手で押しやって流してあげ、全くなにごともなかったように顔を洗い口を漱いでいるそうです。このような、生きていることも死んでいることも同じ、そんな境地が〈悟り〉だと感じたのですが。

青木：僕は正岡子規が七転八倒の病床で言った「どんなことがあっても平気で生きる」というのが〈悟り〉だと思う。逆に「平気で死ぬ」というのはどうもヤケクソで、特攻隊とか三島由紀夫の世界だという気がします。

佐多：ところで、ご著書の『納棺夫日記』はベストセラーになりましたが、そのことで何か変わりましたか。

青木：葬儀屋のイメージが変わったことでしょうか。お寺などで一目置いていただけようになったことが一番嬉しかったですね。それまでは土下座をしてお布施を渡していたのが、逆にお礼をいただくようになりました。

今度われわれ葬儀の団体が労働省に働きかけて、葬祭ディレクターという資格制度を設けようとしています。アメリカでは大学で2年間、解剖学などの勉強をしなければエンバーミング（遺体衛生保全）の資格がとれませんし、葬儀社も弁護士資格がなければ開業できません。それに近いような形をとることが日本の国で葬儀に携わる人たちの社会的地位を上げる第一歩だと思います。我々としても、式次第や司会進行だけでなく、衛生学やら宗教、民族学の知識も身につけてはなりません。

日本人の中に、穢れたものは遠くに、汚いものには蓋という意識があります。が、この発想を変えないと駄目だと思います。焼き場は街の中心から最も離れたところ、つぎに老人施設、そして心身障害者施設。これはうば捨て思想ですね。そんな発想を180度変えて、汚いものは清潔に、穢土は浄土にといった〈生死一如〉に生きる思想を具現したいですね。それには、携わる人間が努力していくことが大事なんでしょうね。（写真：小池 守）